

匂衣（におい）

〜The blind and the dog〜

作 鈴木アツト

登場人物

- ペク・ヨンジュ
- 後藤田彩香
- 後藤田鈴蘭
- 万丈武
- 光一郎
- 巖島

豪華な応接間。壺や絵画、よくわからないが高級そうな骨董品が飾られている。そこで待たされているペク・ヨンジュ、荷物の中から手鏡を出し、髪型を整えたりして、時間を潰している。ヨンジュ、たくさんの骨董品を眺めていると、それを使って遊びたくなってくる。例えば、置き人形の二つに、

ヨンジュ「はじめまして」

と手を差し出して、握手したり。日本語の「はじめまして」を練習したり。そういった感じで、骨董品のいくつつかを使って、遊びを始める。子供ばい遊び。遊んでいるうちに、細かい部分（壺なら取っ手、人形なら頭）が取れてしまう。

ヨンジュ「えっ」

うるたえるヨンジュ。すると、その品物はどんどん壊れていく。バラバラになったそれはどうするべきか？どこかに捨ててしまえばバレないのではないか？そう考えて壊れた品物を手にした途端、

後藤田「お待たせしました」

ドアがガチャッと開き、後藤田、入ってくる。ヨンジュ、慌てて品物を役者ならではのウォームアップの体操で隠す。

後藤田「はじめまして後藤田です」

ヨンジュ「後ろ向きで挨拶（はじめましてペク・ヨンジュです）」

後藤田「（値踏みをするように）ヨンジュを見つめながら（ペク・ヨンジュさん）」

ヨンジュ「（変な体勢で）はい」

後藤田「（値踏みをするように）見つめながら（ペク・ヨンジュさん）」

ヨンジュ「（変な体勢で）はい」

後藤田「ペ・ヨンジュンっ」

ヨンジュ「いえペク・ヨンジュです」

後藤田「ヨン様に似てるー」

ヨンジュ「よく言われます」

後藤田「遠かったでしょっうちっ」

ヨンジュ「そんなでもなかったですよ」

後藤田「駅からはタクシーで？」

ヨンジュ「いや歩いてきました」

後藤田「よく道わかりましたね」

ヨンジュ「ずっとまっすぐですから迷いませんよ」

後藤田「でもあんなにずっとまっすぐだと行き過ぎてないか不安になりませんか？」

ヨンジュ「地図とにらめっこしながら来たんで」

後藤田「ペクさんは地図に強いよね」

ヨンジュ「歩くの好きなんですよ。いつも稽古場まで二十分ぐらい歩いてるんです」

後藤田「日本に来て何年になるの？」

ヨンジュ「3年目です」

後藤田「それでそんなに日本語喋れるの？」

ヨンジュ「俳優は外国語を覚えるの早いんです。覚えないと台詞が減ってくから」

後藤田「小劇場でしたっけ？」

ヨンジュ「はい」

後藤田「素晴らしかったはあなたの演技。変幻自在っていうかね。椅子を使って人から蛇にな

ったり人から象になったり」

ヨンジュ「ありがとうございます」

後藤田「私この間が初めてだったんです。ああいうの見るの。あれってお手当てはちゃんと出るの？」

ヨンジュ「出たり出なかったり」

後藤田「じゃあ結構出ることも多いんですか？」

ヨンジュ「出なかったり出なかったりごくまれに出るんです」

後藤田「あのっ」

ヨンジュ「はい」

後藤田「早速ですがお話をさせていただいてよろしいですか？」

ヨンジュ「変な体勢のまま」お願いします」

後藤田「どうしたんですか？」

ヨンジュ「いえ大丈夫です」

後藤田、ヨンジュの変な体勢を訝しがり、ヨンジュに近づく。

ヨンジュ「ああ、ああ、ああ」

ピンポンとチャイムの鳴る音。

後藤田「誰かしらっ？」

後藤田、インターフォンに出る。万丈、後藤田家の玄関の前に登場。万丈は、スーツだがアフロヘアー。ぽい髪型のややチャライ若者。後藤田と万丈、インターフォン越しに話す。

後藤田「はい」

万丈「今よろしいでしょうか？」

後藤田「どういったご用件でしょうか？」

万丈「私ニコラクリームの万丈と申します」

後藤田「はい」

万丈「この度我が社の新製品が発売されました」

後藤田「はい」

万丈「是非一度お試しくださいだけないかと思ってお持ちした次第なのですが」

後藤田「私いつも決まったところのを使ってるの」

万丈「そうですね。そうですね。けれども。けれどもこの度の新製品はそういったお客様

にも満足していただけるものでございまして特にこの（靴からハンドクリームを取り出し）

モイスチャーニコラクリームは（東京大学の）

後藤田「（遮るように）間に合ってるわ」

万丈「サンプルだけでも使ってみていただけないですかね？」

後藤田「じゃあポストに入れといてください」

万丈「かしこまりました。それでは明日また伺いま（すので）」

後藤田、インターフォンを切る。万丈、退場。

後藤田「どこまでお話ししましたっけ？」

ヨンジュ「まだ何も」

後藤田「あらそう？」

ヨンジュ「はい」

後藤田「では始めからお話させていただけます」

ヨンジュ「（変な体勢のまま）お願いします」

後藤田「あのうさっきから、」

ヨンジュ「いえ大丈夫です」

後藤田、再び、ヨンジュの変な体勢に気づき、ヨンジュに近づく。

ヨンジュ「ああ、ああ、ああ」

後藤田「壊しちゃったんですか？」

ヨンジュ「すみません、ついさわりなくなっちゃって」

後藤田「後で直させますから。どうぞお座りください」

後藤田、ヨンジュに椅子を勧め、ヨンジュ座る。

後藤田「あなたに演じてもらいたいのは、我が家の愛犬、ブービエ・デ・フランダースのオス、

ヨソベエ」

ヨンジュ「はい？」

後藤田「ブービエ・デ・フランダースはあのフランダースの犬のパトラッシュとして日本でもお馴染みの犬種で番犬として外敵に対してはものすごく攻撃的なのに飼い主には極めて従順で忠実なんです。とても穏やかな性格で人間と接することができる犬なんです。今回あなたにはただひたすらこの手と尻尾を使って」

後藤田、大きな手袋のような犬のそれぞれの部位（前足と尻尾）のついた道具をヨンジュに渡す。前足の道具には足の爪と毛がついており、尻尾の道具はやや長い毛で作られている。

後藤田「ヨソベエの振りをしてもらいたいんです」

ヨンジュ「・・・（呆然として、2つの手袋のようなものを眺める）」

後藤田「手と尻尾を使うと言ってもヨソベエはお行儀のいい子だったから彩香に突然抱きついたりなんて下品なことはしなかったから安心してください。彩香は妙に気持ちが落ち込むことがあるのだけどそんな時にヨソベエは前足を彩香の膝にポンとつけてあげてほしいんです。だからそういう時にだけでいいので彩香の膝に前足をのっけてあげてほしいんです」

ヨンジュ「・・・（呆然として、尻尾の道具をいじる）」

後藤田「何か質問ありますか？」

ヨンジュ「何かの冗談でしょうか？」

後藤田「いたって真剣ですけども」

ヨンジュ「演技の仕事があるって聞いたんです」

後藤田「はい演技の仕事です」

ヨンジュ「演技って犬ですか？」

後藤田「そうです」

ヨンジュ「犬よ？」

後藤田「犬じゃいけませんか？」

ヨンジュ「なんで犬になるんですか？」

後藤田「ヨソベエ死んじゃったんですよ」

ヨンジユ「え?」

後藤田「交通事故です。散歩中にちょっと目を離していたら向こうからすごい大きなクロネコヤマトが走ってきてヨソベエを轢いたの。猫なのにヨソベエを轢いたの」

ヨンジユ「愁傷様です。でもそれと私がヨソベエを演じるのとってどっつながらんですか?」

後藤田「ヨソベエを生き返らせたんです。少なくとも彩香の前では」

ヨンジユ「彩香さん?」

後藤田「娘です」

ヨンジユ「彩香さんは知ってるんですよね?」

後藤田「彩香にはヨソベエは入院中だって言ってる。そしてもう二週間たった。つまりね、そろそろ退院しなきゃいけないの」

ヨンジユ、応接間を出ようとする。

後藤田「どこ行くんですか?」

ヨンジユ「帰ります」

後藤田「ちょっと待って。何言ってるんですか?」

ヨンジユ「こんな仕事請けられるわけないでしょ?」

後藤田「ペクさんペクさん、兜!」

後藤田、突然大きな声で怒鳴る。

ヨンジユ「は?」

後藤田「これ!800万円!あなたが壊したやつ」

ヨンジユ「嘘でしょ?800万?」

後藤田「お仕事を引き受けてくださるんだったら忘れてもいいんですけどね」

ヨンジユ「そんなの卑怯です」

後藤田「あなたが勝手に壊したんです」

ヨンジユ「800万?」

彩香の声「ママ、ドライバー知らない?」

後藤田「え?」

彩香の声「ドライバーがいつものところにないんだけどママ使った?」

後藤田「(ヨンジユに)ちょっと待ってて」

後藤田、退場。途端、ドアを開け、彩香が入ってくる。首には、豪華な金の首飾り、指には大きな宝石のついた指輪をしている。綾香、椅子に座って髪を梳かし始める。その

様子を見つめるヨンジュ。二人だけの時間の緊張感が一瞬そこに現れる。彩香、部屋の臭いを嗅ぐ。ペク・ヨンジュの匂いがする（音で表される）。

彩香「え？ママ？」

ちょうど、後藤田が戻ってきて、

彩香「誰がいる？」

後藤田「ああ（ヨンジュを見て）「こちらは獣医の」

ヨンジュ「え？獣医？」

後藤田「ペク先生」

ヨンジュ「あはいペク・ヨンジュです」

彩香「（ママに）「え？韓国の人？」

後藤田「そう。韓国人の先生。ヨソベエを手術してくださったのよ」

彩香「はじめまして」

ヨンジュ「はじめまして」

彩香「先生、ヨソベエは元気になりましたか？」

ヨンジュ「ええと？すっかり？元気です？」

後藤田、ヨンジュに話を先に進めるように促す。

彩香「今どこにいるんですか？」

後藤田「先生の病院よね」

ヨンジュ「え？あ？はい」

彩香「今日は帰って来ない？」

後藤田「もしかしたら今日帰ってくるかも」

彩香「本当？」

後藤田「彩香。そのことについて先生とまだお話が残ってるからお部屋に戻ってて」

彩香「はい。（ヨンジュに頭を下げながら）先生、よろしく願います」

ヨンジュ「わかりました」

後藤田「ハイ、ドライヤー」

後藤田、ヨンジュと彩香が握手しようとしたところを、横からドライヤーを差し出して、二人の手がふれるのを阻止する。彩香、ドライヤーを受け取り、おどおどしながらドアの外へ出て行く。

ヨンジユ「目が（見えないんですか？）」

後藤田「物心つくちよっと前に病気で。でもかわいい子でしょ？」

ヨンジユ「あの指輪は奥様が買ってあげたんですか？」

後藤田「そうです」

ヨンジユ「すごい指輪ですね。私びっくりしちゃいました」

後藤田「あれぐらいこの家にはいくらでもありますから」

ヨンジユ「でも彩香さんには見えないですよね？」

後藤田「指環のおかげで他の人があの子を見る。今のあなたみたいに」

と喋りながら、後藤田、ヨンジユに香水をかける。

ヨンジユ「変な臭いを感じ、鼻をクンクンさせながら）なんですか？これは」

後藤田「彩香あなたの匂い嗅いでたでしょ？」

ヨンジユ「そっいえば」

後藤田「あの子とても鼻がいいんです」

ヨンジユ「これ香水？」

後藤田「犬の体臭の香水」

ヨンジユ「は？」

後藤田「ヨソベエの遺体から特注で作らせたんです」

ヨンジユ「遺体？」

後藤田「この臭いがしないと彩香にヨソベエじゃないってバレちゃうから」

ヨンジユ「今遺体って言いました？」

後藤田「はい」

ヨンジユ「うげえ」

後藤田「大丈夫です。香水です。人体に害はありません」

ヨンジユ「あのうやっぱり・・・」

後藤田「断られるのを先回りして）日給2万円いや5万円ならどうですか？」

ヨンジユ「お金の問題じゃないんです。ヨソベエ死んじゃってるんですよ？」

後藤田「はい」

ヨンジユ「ってことは彩香さんを騙すってことですよね？」

後藤田「そうです。騙したいからあなたにお願いしてるんです」

ヨンジユ「騙すのはよくないですー！」

後藤田「。ピュアですか？」

ヨンジユ「え？」

後藤田「まさかピュアじゃないでしょうね？」

ヨンジユ「別にピュアじゃないですけど」

後藤田「。ピュアペクさん」

ヨンジユ「ペクでいいです」

後藤田「生まれてから今まで嘘ついたことないって言うんじゃないでしょうねえ？」
ヨンジユ「もちろんしょっちゅう嘘ついてますけど」

後藤田「あなたがやってくれなかったら彩香はヨソベエを失うんです。それでも断るって言うんですか？」

ヨンジユ「……」

後藤田「彩香にとってあなたのヨソベエが真実であればいいでしょ？あなたの演技力をお願いします」

ヨンジユ「私の……」

後藤田「お願いします」

ヨンジユ「わかりました。やらせてください」

後藤田「じゃあ早速ですが」

後藤田、【ヨソベエ】の足と尻尾を使って、実際にデモンストレーションしてみせる。

後藤田「これがお手。これがお回り。これが伏せ。これがゴロン。彩香がいろいろ言うってくるからそれに合わせて対応して」

ヨンジユ「こんなんでも本当にバシないんでしょうか？」

後藤田「目をつぶってみて」

ヨンジユ、目をつぶり後藤田の【ヨソベエ】の足と尻尾にさわる。

ヨンジユ「え？おおおおお犬ぼい」

後藤田「私達は物を見る時まず全体を見てから部分を見る。でも彩香はまず部分を把握してから全体を見る。だから丁寧に部分を感じさせて」

ヨンジユ、実際に【ヨソベエ】の足と尻尾を動かしてみる。

ヨンジユ「声は出せない？」

後藤田「ちょっとなら吠えてもいいですよ」

ヨンジユ「私、犬の鳴き真似得意なんです」

後藤田「ヨソベエはどちらかというが無口であまり吠えな（い）」

ヨンジユ「フン……こんな感じどうですか？」

後藤田「いいんじゃないですか」

ヨンジユ「ウオウオウオーウオンー」

後藤田「すごくいいですーでも吠えすぎるのはなしです。ヨソベエは無口であまり吠えない犬でしたから」

ヨンジュ「わかりました。ウォン」

後藤田「実はね今日これから彩香と映画に行くことになってるの」

彩香、登場。するとその空間は彩香の部屋に変わる。

後藤田「私の支度ができたらすぐに。だからあなたは今から15分だけヨソベエを演じる。い

い？15分絶対に人間だってバレないようにしてください」

ヨンジュ「わかりました」

後藤田「じゃあ行きましょう」

後藤田とヨンジュ、部屋を出ようとする。ヨンジュの携帯電話が鳴る。

ヨンジュ「慌てて電源を切って」すみません。メールです」

後藤田「ケータイの電源は切ってください。犬はケータイ持ってないんで」

ヨンジュ、後藤田に携帯電話の電源を切っているのを見せる。

ヨンジュ「はっ」

後藤田、部屋を出る。

ヨンジュ「ウォン、ウォウオーウォン」

ヨンジュ、後藤田に続いて部屋を出て行く。

本作品の著作権は作者に帰属します。無断での上演・掲載・配布等は固くお断り申し上げます。月いちリーディングで取りあげるすべての戯曲は、これからのブラッシュアップを目指す、進行形の作品であることをご理解のうえお読みください。